

平成29年度入学式式辞

大平山のなだらかな稜線が空に溶け込み青く霞む季節。本日この佳き日に、同窓会副会長様、定時制課程PTA会長様、通信制課程悠友会会長様をはじめとするご来賓の皆様のご臨席のもと、保護者の皆様をお迎えし、平成29年度入学式を挙げていただけますことは、本校にとりまして、この上ない喜びとするところでございます。ご臨席賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

只今、入学を許可された皆さん、入学おめでとうございます。

皆さんが、本日から、私たち学悠館高の仲間となられることに対して、教職員を代表して、心から歓迎いたします。

本校は、高等学校教育を希望する多様な生徒の学習ニーズに応えるとともに、主体的に学びながら、個性を生かし、資質・能力を伸ばせる新しいタイプの学校として、平成17年に開校しました。今年で13年目を迎え、卒業生は2000名を超えております。

昼夜間開講の選択幅の広い教育課程を編成するとともに、単位制という柔軟な学習システムを導入することによって、意欲のある人が、学習目的や学習歴、あるいは生活環境等に応じて、いつでも学ぶことができる、やり直しのきく学校づくりを進めているところでございます。

各自の学習計画に応じて授業編成を行い、緩やかな学習集団、人間関係のもとで生活を送れる本校は、これまでの学校教育に十分に適応することが難しかった不登校経験者等への支援という点でも成果をあげてきました。また、地域とともに歩む学校として教育資源を外部に開放し、公開講座に100名を超える県民の方々を集めております。

本日入学した生徒の皆さん。本校の生徒指標は、「希望」「自立」「共生」の3つです。自分を見つめ、未来の姿を描いて夢を語る心を持つ。自分の意志で決め、それをやり遂げる自己管理能力を高める。ともに生きる楽しさを感じ、他者に貢献できることの喜びを知る。卒業までにこのような力を、今の自分のレベルに応じて高めていっていただきたいと思えます。

さて、進行性筋ジストロフィーを患いながら起業し、介護・医療機器の会社社長を務め、2003年にアメリカ経済誌の「アジアの星」に選ばれた春山満さんという方がいます。毎日筋肉がカンナでそがれるように病気が進んでいく中、仕事に取り組み続けた春山さんは、あるインタビューに答えて次のような言葉を残しています。

「僕はたまたま難病をきっかけに宿命として、いろいろなものを奪われてきた。

足が動かなくなり、手が効かなくなると、首から下が動かなくなると。

考えれば絶望しかない。

ただ僕は、どうやって生きていこうと考えた。

なくしたものを100回嘆いたって、そこに道は見つからなかった。

それよりも、あと何が残っているか考えた時、こうやってしゃべることができる、見える、聞こえる、感じられる、何よりも考えられる、こんな力をまだ残してくれた。

もうなくしたものも数えない。

その代わり、残されたものを誰よりも磨いて、誰よりも使って、とにかく生き抜くために力をつけよう。

僕はそうやって、たまたま20代30代歩いてきた。

だから、なくしたものを数えないで、残っているものを本当にありがたいと思って、こういうところに僕は道は開けてくるのだと。」

入学したみなさんの中にも、これまでに色々な困難を乗り越えて、本校への入学に辿り着いた人もいます。本校での生活のスタートを切るにあたって、今までの自分に囚われることなく、自分の強みを磨くことからはじめてみてはいかがでしょうか。一歩踏み出す勇気をもって、自分にチャレンジしてください。私たちは、精一杯そのお手伝いをいたします。

結びになりますが、保護者の皆様、お子様のご入学、誠におめでとうございます。今まで幾多の試練を乗り越え、育んでこられましたお子様の本日の姿に、感慨いかばかりかとお拝察いたします。私どもに寄せられている大きな期待をしっかりと受け止め、教職員一同、一丸となってお子様一人ひとりの自己実現のために努力を惜しまない所存でございます。ともにお子様を育てていくという意識のもとに、本校の教育にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

そして、新入生の皆さんが早く生活に慣れ、本校が一人ひとりの安心の場、成長の場となりますよう祈念して、式辞といたします。

平成29年4月7日

栃木県立学悠館高等学校長 大森 亮一